

この学校にわたしたち

2022. 05. 20 N09

ありのままの自分を信じること



少し前に読んだ本（『僕が大人になったら』P HP文庫）の中に、テレビ番組「題名のない音楽会」でおなじみの佐渡裕（さどゆたか）さんが小学校の卒業文集に「大人になったらベルリン・フィルの指揮者になりたい」と書き、それを約40年かけて実現したと書いてありました。佐渡さんはかつてフランスで生活していた時、自信とは「ありのままの自分を信じられること」であると苦闘しながら学んだそうです。

それまでの佐渡さんは、自信＝自分を強く見せることと錯覚していたそうです。「偉く見せよう」「強く見せよう」という虚勢は多くの場合、自信のなさや後ろめたさの表れであることが多いと思います。とはいっても、「ありのままにしよう」と思うだけで、自然に実力が身につくわけではありません。サッカーや野球、バレーボール、いや全ての分野において活躍している人が、一朝一夕に夢をつかんだわけではないことは、もはや言うまでもないでしょう。学校だより7号でお伝えした6年生の陸上で頑張っている3名も小さい頃からの努力の積み重ねであったことと思います。何事もすぐには結果が出ずに、何年・何十年とかかることが多いかもしれません。しかし、夢に向かって地道に積み重ねた努力は、誰が見ずとも自分は知っています。それこそが、逆境の時、人生の勝負どころで、あきらめずにありのままの自分を信じてもう一步頑張れる原動力になることと思います。子どもたちは勉強以外にも、スポーツや音楽など様々なことに挑戦していることでしょう。

今、結果が出なくて焦ることもあるかもしれません。でも、今、頑張っているその事実は間違いなく自分の歴史に刻み込まれています。子どもたちには佐渡裕さんのように焦らず、コツコツと地味なところで頑張れる心を持ってほしいと日々思っています。

校長室が子どもにとって「安心感の基地に…」

先週、朝、校長室の入り口を開けていた時、1人の児童が興味深そうに覗いていたので「入っていいよ」と言い、その児童とソファに座って雑談をしました。ちょうどその時、通りかかった別の児童も校長室に入ってきて一緒に話をしました。子どもたちと色々な話ができてとても有意義な時間でした。校長室は特別な部屋であってはいけないと思います。子どもたちが他愛もない話をする場…何かちょっと言いたくなる場として、子どもたちにとって「安心感の基地」でありたいと思います。

